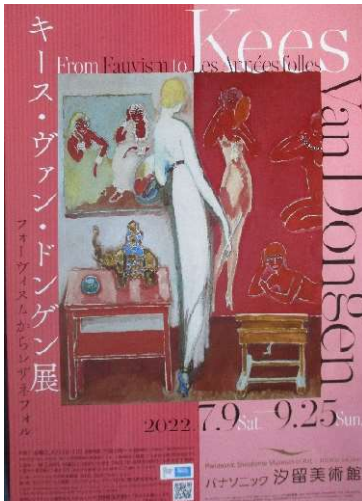


キース・ヴァン・ドンゲン展

フォーヴィスムからレザネフォル

パナソニック汐留美術館 2022.07.09～09.25



オランダ生まれの「キース・ヴァン・ドンゲン」(1877～1968)は、で20歳時にパリ・モンマルトンに移り住んで力強い筆致の作品を描いていた。

パリ滞在中に新印象派に関心を抱き、やがて濃密で表情豊かな強烈ともいえる色彩で「フォーヴィスム(野獣派)」の画家たちの一員になって、華麗な色調でありながら内的な表情を感じさせる色を用いて、なかでも女性を描く場合の身体の優美さや官能性を訴える画面は画伯の代名詞になっていった。

本展は、この希有な芸術家がフォーヴィスムの画家へと成長する過程を紹介し、その後、第一次世界大戦までの時期に取り組んだ色彩と形態の研究に加えて、人物表現というテーマ、そして大戦終結後の狂騒の20年代「レザネフォル」(フランスの1920年代の時代のこと)における画家の歩みに焦点を当てて紹介をしている。

画伯は、1920年代になると社交界との交流から「肖像画家」として多数の注文を受けるようになり、彼独自のスタイルである“華奢で細長くてデフォルメ(変形)されたしなやかな人物像は、極めて洗練された色彩で表現され、当時上流階級の人々から絶賛な人気を博した”と評価されている。

本邦で44年振りに開催される今回の個展では、“巧みな人物デッサンと官能的表現を生かし、各時代の特徴的な色彩、形、そしてそれらが調和する姿を、新印象派からフォーヴィスムの時代、フォーヴィスムの余派の時代、レザネフォルの時代と3章に分け国内外の優れたコレクションを通じて観賞できる。”



パリのラ・ペ通り(左) 二人のパリジェンヌ(中) ピンク色のドレスの女性(右)